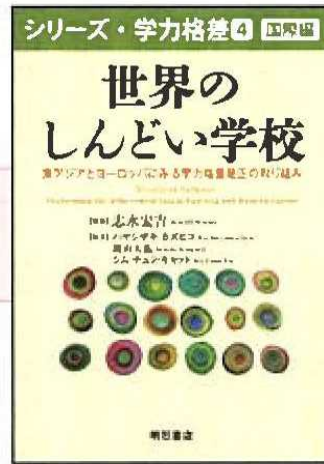


ブック

本著は、アジアとヨーロッパの7カ国について「学力格差是正策」といった視点から、教育事情・教育政策等(第一部)と、各国の小学校を対象に、経年的な参与観察を行った事例(第二部)、最後に日本への示唆を述べている。

第一部では、学力向上のために、貧困層への経済支援策や教師の児童一人ひとりの特徴を引き出す教育実践能力、及び、児童に身に付けさせるべき能力として、ペーパーテストで測ることができない「表現力」の能力も学力として考慮すべきであること等を語っている。第二部では、「各国のしんどい小学校」について、例えば、シンガポールのマライオン小学校では、学校による自由裁量でチームティーチングと少人数クラスが中心の取り組みを行うことで、低学力児童への学習促進と支援体制が功を奏していることを紹介

世界のしんどい学校 東アジアとヨーロッパにみる 学力格差是正の取り組み



監修 志水宏吉
著者 ハヤシム、ザキカズヒコ、園山大祐、シム・チュン・キヤット 編著
3080円 明石書店 ☎03-5818-1171

している。「教師の仕事は教えることだけでなく児童と感情的な関わりができなければ教員もただ教室で喋っている人に過ぎない」と教員が語っているのが印象深い。また、イングランドのマルメスベリー小学校では、エスニック・マイノリティの割合が90・4%で、第1言語が非英語である児童の割合が66・1%

である。この学校では一般的な低学力の児童への支援策として、多くの児童が他教科を学習している時に、進度が遅れている児童を集中して教える「介入(とりだしintervention)」と、高学年で全国試験での合格点ギリギリより下にいる児童を対象にした「促進(boost)」が行われている。

このような教育現場の様々な困難に向き合い諦めずにがんばる教師に、「どの国でも先生はがんばっている。捨てたものではない」と監修者が語っているが、「教師としてのやりがいを感じ充実している姿」に出会える1冊である。

(愛知教育大学教授・高橋美由紀)